
presentation

八月一日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

presentation

【Nコード】

N6028T

【作者名】

八月一日

【あらすじ】

地球が存在してるこの宇宙以外にも宇宙がある。

そんなこと数百年も前に解明されてる事。そして、その他の宇宙の世界 異世界 との行き帰りも確立されてる。

かといって定説を実証してここにいたるまではかなりの犠牲が出たみたいだけど。たしか、地球の世界人口が七十億から四十億に減ったとか。

三十億もの人間をたった5日間で喰い殺した異系の化け物。

超真空空間。それが全ての宇宙の始まり。その越えられるはずのない真空世界をこじ開けて異世界への道を作った、報い。

いたる世界へと門が作られて、ハンターと呼ばれる者たちが次々に異世界へた渡った。依頼を受けてそれをこなして莫大な報酬を得るため、過激なスリルのため、各ハンターは想い抱くものを抱いて。

とある魔女と男の出会いと序章（前書き）

新作スタートです。

まずは序章。

とある魔女と男の出会いと序章

地球が存在してるこの宇宙以外にも宇宙がある。

そんなこと数百年も前に解明されてる事。そして、その他の宇宙の世界 異世界 との行き帰りも確立されてる。

かといって定説を実証してここにいたるまではかなりの犠牲が出たみたいだけど。たしか、地球の世界人口が七十億から四十億に減ったとか。

三十億もの人間をたった5日間で喰い殺した異系の化け物。

超真空空間。それが全ての宇宙の始まり。その越えられるはずのない真空世界をこじ開けて異世界への道を作った、報い。

いたる世界へと門が作られて、シークと呼ばれる者たちが次々に異世界へた渡った。依頼を受けてそれをこなして莫大な報酬を得るため、過激なスリルのため、各シークは想い抱くものを抱いて。

とある草原。寝転がって空を見てる私。

踝付近まで伸ばしてある銀髪が風になびいてる。その風に乗って血の匂いもする。

「で、そのアミールを殺した理由は？」

顔もあげずに匂いのした方向に声を向けた。

「依頼で」

アミールというのは、体を構成しているものが宝石、あるいはその準ずる高価値な生物。地球にいるウォンバットに似てる。

アミールは臆病な生物で、襲わない限りはなにもしてこない。

「その子、私に結構なついてたんだけど」

臆病なかわりに、何もしなければそれなりになつく。今後ろにいる男が、串刺しにしているアミールは呼べば来るくらいになついていた。

「子供もいたはずだけど、殺した？」

「いや、コイツだけ」

「珍しく『親子』を認識して家族形成する性質があるのに、どうやって引きがしたわけ？ 大人になるまで母親に終始べつたりのはずだけど」

他の生き物は成長したら親子なんて関係ない。でも、アミールは自分の親兄弟認識できる。それも人間と同等レベルでの認識が。

「結界でもはって閉じ込めた？ それとも手足切り飛ばした？」

「後者なら……」。

「巣穴に埋めた」

「生き埋め……」

寝転がっていた体を起こして、改めて男と対面。へえ、整った顔立ち。

「さて、と。『ギンロウの魔女』知ってる？」

「？ ああ、ハンター殺しだろ」

「じゃあ問題です。そのギンロウの魔女はだーれだ」

大気中のマナを掌握。続いて掌握したマナに指向性と属性付加。

「……は？」

「時間切れ。バイバイ」

光属性を付加したマナの塊　　ヴィマナを男に向けて放つ。

さて、生き埋めにされたアミールのとこにで、も……。

「……へえ」

「つたく、殺す気かよ」

「結構、というか本気だったんだけど」

男の手にはアミールを串刺しにしていた剣。ふむ、魔導鋼かなにかつてとこ。だとしても相当純度が高そうね。

「で、あんたはどうやったら死ぬわけ？」

「あんたって……俺には高峰^{たかみねともや}朋弥^{ともや}って名前があるっての」

「あらそう。魔女なんて言われてるけど私にもイグリーフ・マリアって名前あるんだけど」

朋弥が剣を構える。それと同時に私も周囲のマナを全て掌握する。

「今度はきつちり殺すから」

「やれるもんならな」

とある魔女と男の出会いと序章（後書き）

はい、新作です。ファンタジーです。初ジャンルです。活動報告にも書いたとおり、はっちゃんけてみました。

第1章 1 門出

あー、今日なにしよう。というか、まず何食べよう。クラウンジャム塗ったトーストでもいいかなあ。んー、でもクラウンの実取りに行くのメンドイしなあ……ん？ なんかおかしいような……。

んんん？

「……」

なんでベッドの上？ というか、なに」。

「やっと起きたか」

「……とりあえずさくつと殺していい？」

「おい、わざわざ連れてきてやってたのに扱いひでえな」

「誰が頼んだのよ……で、」

「どっつて、俺の部屋」

「誰もそんな事聞いてないわよ。ここが“どこか”ってきいてんの」「どっつて」

地球だけだ。

なるほど、あの後どうなったかは現状で把握できるけど、あのあとティアから『災厄の惑星』（地球）に連れてこられたわけ……。

「じゃ、帰るわ」

「帰るっていつても、門くぐれねえぞお前」

「は？」

「門くぐるんだったらシークじゃねえと無理だし。そのまえに通行料払えねえだろ」

「……」

なにそれ。てか、こいつ。

「あんだ、それわかってて連れてきたわけ？」

「じゃああのまま草原の上に転がしとけばよかつたってか？」

「少なくとも、災悪の惑星に連れてこられるくらいならそのほうがマシよ」

といか、ティアに私をどうにかしようなんて考えを起す奴なんではない。無駄だとわかってるから、無意味だと知っているから。

「つたく、あんだのせいで面倒なことになったじゃないのよ……」

「転送魔術くらいいつかえるだろ、ギンロウの魔女なら」

「災悪の愚民の発想やめてくれる？ 次元間超えるとなると超高密度真空間に穴をこじ開けないといけないでしょうが。いくら私でもそんなことしたら越える途中で真空間に飲み込まれて即死よ」

「じゃあシークになって金稼いで正当方で門越えるしかないな」

このクソヤロウが。ニヤニヤした顔でいうじゃないの。

「で、どうする？ シーク認証試験受けるか？」

「その回答は受ける意外に用意されてるわけ？」

「さあ、どうだろうな？」

「……」。

*** ** *

「で、何これ」

「何、って見ての通り初期装備」

「だーからー、なんで私がこんなのつけなきゃいけないのよっ！
？ ってか、こんなゴミみたいなものつけてるの無意味でしょうがっ
！ かえって邪魔」

しづしづ朋弥について行くと、かなり大きい建物の中にはいつて
いった。構造としては、2階建てのコ鉄筋コンクリ。

1階には受付カウンターとラウンジ、奥に通じる通路と食堂と医
務室その他。2階にはリラクゼーション室などなど。そして今私は、
1階の受付カウンター奥の広間にいる。紙切れ同然の初期装備とや
らをつけさせられて。

「初階級者はそれつけねえと門くぐれねえから脱ぐなよ」

門くぐったら絶対脱ぐ。そして捨てる。

「で、なんで朋弥は重装備なわけ」

「なんでって、シーク歴何年だと思ってるんだよ」

「んなの知らないわよ」

朋弥の格好はティアで見たそのまんま。あー、思い出すだけでも
腹が立つ。てか、ヴィマナどうやって防いだってのよあんどき。そ
もそも、なんで私が負けんのよ。

「じゃあラグジュアブルで」

朋弥がそういうと、広間奥の両開きの扉が開いてかなりヤバげな
色合いのワームホールみたいのがあった。

「おーし、行くぞー」

「な、ちよ、待ちなさいよっ！」

第1章 1 門出(後書き)

はい、1話です。

コンセプト、というかツバサ+モンハンってこんなんじゃない？って考えて書いてるんですけど、今さらですけどモンハンやったことないですよ。家にある最新ゲーム機PS2ですからw

さて、ギンロウの魔女ことイグリーフ・マリアと高峰朋也の両2名がラグジュアブルに行く話です。

一応、今のところでは1章はマリアがハンターになるまでを書こうかなあっと思ってます、はい。

では次回！

2 ミッションスタート

「ほいついた」

「……」

「おい」

「何」

「何じゃねえだろ、なに装備はずしてんだよ」

「こんな紙切れみたいなのあってもなくても同じでしょうが」

そもそも邪魔だし。

さてと、ラグジュアブルって言ったっけここ。うん……。

「なんもないとこじゃない、ここ」

「そりゃ、ラグジュアブルの荒野だしなここ」

荒野って……ん？

「なにこれ、地鳴り？」

「くるぞー」

まあ、足元になんかいるのはわかるけど。ティアにも似たのがいるし。

「で、これの名前何」

「なんだっけ、たしかデスワームじゃね？」

飛びのいた地面から体長20メートルくらいの触手を、口らしき部分からはやしたワームが出てきた。気持ち悪い造型なことだ。

「で、なに。これ殺せばいいわけ？」

「あー、説明してなかったな。シーク資格譲渡規約として、ラゲジユアブルに生息してる『ククール』の瞳を持って帰るのが条件な」
「……こいつの名前、なんだっけ」
「デスワーム」

飛びのいた先からとぐるを巻いて、触手をつねらせながらこつちをみてるクソムシを見ながら一応聞いてみる。うん、オツケー。

「……うせる」

マナを掌握して圧縮、属性付加。

「炭化するまで焼くか？ 普通」

朋弥が炭化したクソムシを感慨深そうに見てる。まあ、知ったことじゃない。

「当然でしょうが。で、ククールってどこいんのよ」

「あっち」

「は？」

「あっちにある泉の底」

朋弥が指差した方向には、確かに泉がある。あるけ、今コイツ底って言わなかった？

「そのまえにさ、ククールって何」

「30メートルくらいあるデカイ両生類」

「で、その眼球抉り取って持っていけばいいわけ？」

「眼球って……まあ、必要なのは眼球の中にある紅玉な」

眼球の中に紅玉ねえ……アミールの眼もそんな感じだったけ。
まあ、アミールの方がかわいいけど。

「その両生類って泉の底にいるんでしょ？」
「ああ」

泉の底ねえ……どうやって引きずり出すかなあ。あれとかこれとかあんなもいいだろうけど、うーん。

「何考え込んでんだ？」

「泉の底からどうやって引きずり出そうかなあと」

「いや、別に引きずり出さなくてもいいけど」

「は？」

「いや、さっき両生類って言ったろ？ 息吸いにあがってくるから」

「……30メートルもあるのがいつ、あがってくるのよ」

「一回吸いに来たら三日くらいは持つな」

よし、決めた。

「引きずり出す」

「待つって選択はねえのかよ」

私は、一刻も早くティアに帰りたいのっ！

2 ミッションスタート（後書き）

はい、2話です。

ターゲットの名前が判明しました、ククール。

なに出てきたのはフォームです。マリアブチ切れですね、はい。

ククールの眼球の中身が必要なわけですけども、必要なわけですけども！

まあ、うん。

では次回！

紅玉がそう簡単に手に入るんですかねえ、今回。

3 セカンドミッション

「さてと、ここにいんの？」

「ああ、ここ泉の底」

歩くのたるいから近距離転移で泉の前に到着。そしたら何故か朋弥も隣にいた。こいつどうなってんの？

「それじゃ、やりますか」

泉の中に手を浸して、とあるものを掌握する。よし、準備完了。

「てかさ、この泉って他なにいんの？」

「いや、30メートル級の奴がいんだからそいつの餌」

「……ようはさっきのクソムシいるわけ」

「あのくらいのサイズならいんじゃないね？」

はあ……まあ、いつか。

「てか、何やる気だよ」

「みてりゃわかるわよ」

掌握物滅却、大気中のマナを掌握して圧縮、そして属性付加。

「……は？」

「酸素滅却程度じゃ話になんないだろうし、とりあえず電氣流してみた」

そのせいで泉がバチバチいってるし。

「あ、きたきた」

言ってる先からなんかあがってきた……は？

「……見間違いじゃなかったらさ、あれなんだけど」

「まあ、見間違いじゃねえな」

泉からあがってきたのは、間違いなくさっきのクソムシ。しかも量もあればデカさも桁違い。

「なんかさ、ククールとかいうのあがってこないんだけど。そもそもこいつら異常じゃない？」

「まあ、異常っちゃ異常だな。こいつら水の中で生きていけないはずだからな、目の前にいること自体異常だ。そもそもこいつらここまでデカくない」

「ぱつとみ3倍くらい？」

「だな。来るぞ」

朋弥の声と同時に、さっきのクソムシの3倍バージョンが襲ってきた。

「あーもうっ、メンドイッ」

「てか、これククールいんのか？ ワームに食われてんじゃないの、これ」

「ちよっと、それじゃ眼球えぐれないじゃないのよ」

「まあ、そうなるな」

「ああああッ、ふざけんなこのクソムシッ！！！」

掌握するマナに際限なんてしない、掴めるだけ掴んで圧縮の限り

を尽くして属性付加。

「な、おま、待てってッ!？」

「消え失せる」

バチバチと帯電音を立てたソレをクソムシに放つ。もちろん、跡形もなく消し飛ばす。

「あん時もこのくらいの威力で撃てばよかった」

「……俺死ぬだろ。てか、肉片も残ってねえじゃねえか」

「当たり前でしょ。残すつもりなかったんだから」

目の前にいた胸糞悪いクソムシは肉片も残らず消しとんだ。うん、消しとんだのはいいけど……。

「水中の酸素滅却して電気流したのに、あのクソムシ以外あがってこないってどういうことよ」

「アイツ以外ないって事は、全部アイツのエサになったってことだろ」

「……じゃあ何、ここってあのクソムシしかいないわけ？」

「水中適応した所を見るとそうっばいな。クールも絶滅してるっばいしな」

「……」

「……」

朋弥を睨み上げたら顔をそらされた。

「で、承認試験のターゲットが絶滅してんにどうなんのよ」

「さ、さあ？ 前例ないし」

「そんなの知らないわよ」

あー、イライラする。この泉ひあがらしてやるつかしら……？

「ねー、見間違いないじゃないといいんだけど」

「あー、見間違いだといいなあ」

干上がらせてやろうと思って泉に近づいたら、底の方からなんかウネウネしたものがものすごい勢いであがってきた。

「なんか、量おかしくない？」

「軽く100越えてるよな、あれ」

「……アレ相手するのいやなんだけど」

「同感。逃げるか」

泉からクソムシがあふれ出してきたと同時に、転移魔法で一気にもその場から離れた。

「で、なんであんたはついてこれるわけ」

「さあな」

「殺すわよ、あんた」

「んな事よりきてるぞ後ろ。しかも量マシで」

「なんなのよここはあああああッ！……！」

振り返るとさらに量が増したクソムシの群れが土煙を上げてこちらに向かって着てる。

「よっしゃ門開いた、飛び込めッ」

「言われなくてもそうするわよッ！……！」

目の間に開いた門に飛び込んだ。振り返った先には地面からさらには出てきたクソムシの群れ。何をどう考えても、ラグジュアブルはデスワームの巣窟になったみたい。

*** **

「は？ 依頼？」

「ラグジュアブルの件伝えたら依頼されたんだけど」

「……何を」

門をくぐって戻ってきた私らは、いちもくさんに受付にかけ込んだ。内容？ もちろんクソムシの件。

それを受付で話すと、カウンターにいた受付嬢はなにやら機械をいじってしばらくすると、なにやら真顔になって、しばらく受付前のソファで待ってるとのこと。そこで、おとなしく待ってたら朋弥が呼ばれて戻ってきたら依頼がどうたらと。

「デスワームに関してはなんともないけどさ、依頼が依頼なんだよなあ」

「だから、その依頼って何よ」

「ラグジュアブルに住んでる唯一の獣人、ラピス・グレコールの救出。危険難易度はデスワームの具合をみてCランク。一応、マリアも俺の付き添いってのが条件で受けられるレベルだな。で、どうする」

「どうするって、どうすんのよ」

「依頼、受けるとはまだ言っていないし断ろうと思えば断れる。まあ、断ったところでそのラピスってのがどうなるかは、目に見えてるけどな」

……はあ、何それ。

「で、そのラピスって奴の容姿は」
「ほらよ」

渡された紙束にはラピスって奴の詳細と顔写真がついてた。

「獣人ねえ、見たところ猫かしら。しかもこの子、何歳？」

「そこ書いてるだろ、16って」

ふーん。

まあ、まとめると

『ラピス・グレコール、性別女。ラグジュアブル在沖の唯一の獣人』

「あー、あれ考えると鬱になるわ」

「通行料また払うのかよ」

「でも、まあ」

「だな」

「さくつと片付けますか」

3 セカンドミッション（後書き）

お久しぶりです。そして久々の更新。

このまえ短編更新したんですけど、連載物は久しぶりです。・

はい、今回の話は害虫駆除のお話し・・・・・・・・・・じゃなくて、
マリアの承認試験の続きです。まあ、クソムシのせいで変な方向に
いつてるんですけども。

では、次回！

4 毛玉良好にて

「ここってこんなんだっけ」

「明らかに風景違うよな」

ラグジュアブルはあのあとどうなったのは知らないけど、あちらこちらに岩がある。しかも下から生えている。

それに合わせて、あちこちの地面に穴があきまくってる。

「……あの穴の下ってどうなってんだろっねー」

「さあ、見てこいよ」

「嫌よ」

目の前に数百単位で穴開いてたら大体の想像は出来るでしょうが。

「で、ラピスってどこいんの」

「この先にある湖畔」

「……この先？」

目の前に数百の穴が開いてるこの先？

「それマジで言ってるの？」

「大マジ」

「……」

2人そろって目の前に広がる数百の穴を見る……うん。

「……ねえ、迂回とかしない？」

「賛成。もうあれに追いかけられるのヤダ」

一々殺していくのも面倒だし、殺した先から湧いてくるだろうし。というところで、ワームがいるであろう数百の穴地帯を避けて迂回ルートを通ることに。

「でもさ、なんでこのラピスって子一人ぼっちなわけ？」
「さあ」

ラグジュアブル唯一の獣人……。

「そもそも、ラグジュアブルって人いんの？ ワームしか見てないんだけど」

「無人惑星だよ。しかもラピスなんてのがいるなんて初耳だぜ？」
「でもこれ依頼でしょ？ どっかの誰かがラピスって子の救出依頼を出したってことでしょ？」

「まあ、そうなるな」

んー……あれこれ考えるの面倒だし、本人に聞けばいいか。

迂回ルートはいいけど、ジャングルみたいに木々が覆い茂ってる……燃やしたい。

「燃やすなよ」

「燃やさないわよ……」

ちっ、燃やせば見晴しいでしょうに。

「で、ラピスって子助けた後どうなるわけ？」

「さあな、依頼主が引き取るなりするんじゃないかねえの？ じゃなきや

救出依頼なんてださねえだろ」

「ふーん……」

獣人の扱いで一番多いのは

「で、今日の前に飛び出てきたコレなに」

「あー……なんだろうな」

ジャングル地帯を歩き進んでいたら目の前に30センチくらいの毛玉が転がってきた。

「ケサランパサランとかか？」

「何それ」

「まあ、簡単に言うと願い事叶えてくれる毛玉」

地球ってそんな毛玉いるの？ ティアには片手くらいの大きさの毛玉みたいなのならいるけど。

「で、そのケセなんとかってこんなサイズ？」

「ニワトリの卵くらい」

「じゃあコレ違うじゃないの」

「だな」

「……」

とりあえず消そうかなあとか思ってたたら、毛玉がこう……パカって開いた。うん、開いたというか丸まっていたのが開いた。

「……」

「……」

「みー」

「いや、みーって……。」

「なんか無害そうなのでできたな」

「どつすんの」

目の前には開いても毛玉みたいな体形の……ウサギみたいなのがいる。うん、けっこうかわいい。

「どつするって言われてもねえ」

「みー」

「……連れてく？」

「邪魔じゃね？」

「クソムシ相手程度なら別にいいですよ」

その場にしゃがむと毛玉はちょこちょこ寄ってきて、抱きかかえても特に抵抗はしなかった。うわー、抱き心地いいわー。

「それ連れてくにしてもどつすんだよ」

「どつするって連れて帰るにきまつてるでしょ」

ふわっふわしてるから抱きあきないわ、」

「で、ラピスって子のとこまであとどのくらい？」

「目の前」

「は？」

「いや、目の前」

朋弥が指差す方に目をやると雑木林の合間から湖畔が見えた。

「じゅ、ちゅうと終わらせませんか」

4 毛玉良好にて（後書き）

はい、更新です。

今回はラピスの家の手間までですね、はい。そして、毛玉の登場です。この毛玉、毛玉のクセに後々の重要キャラという設定です、毛玉なのにな。

そろそろ戦闘描写入ってくる予定なんです、うまくかけるかなあ
〜ってとこです。でも頑張りますよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6028t/>

presentation

2011年10月7日04時13分発行